

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年1月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻1月号(通巻531号)

風土

1



新松子

神蔵

器

日に進むむ二十九回桂郎忌

師の墓や十指をもつて落葉搔く

烏瓜天の音楽こもりをり

くわりんより声あり城師遷化以後

新松子茶杓の銘を「心」とす

落葉掃く巫女の長柄の竹箒
柳散る神に寄進の烏骨鶏
閑伽桶に十一月の天運ぶ
波郷忌や三尺の子に墨磨らす
小春日の玉のごとくに平茶盃
百枚の蕙叩けば冬の来る
妻に添ふ墓誌に空^{あき}あり杜鵑草



竹間集

同人作品



神の留守

徳丸 峻二

板塀にある潜戸や十三夜
黄落の下読むならば哲学書
大根提げ連絡船の渡り板
龍馬忌土屋生首と思ふ障子の開け閉てに
紐長く犬つれ歩く枯野かな
山眠る季や領布ひれふり振山もまた
神留守の川さかのぼる雲の影

鳴翔たせ

宮川みね子

吾亦紅山雲雨をこぼしけり
十月や名水に喉うるほせり
竹を伐る音を間近に寝釈迦堂
一段づつ棚田の水を落しけり
落し水して澄みにけり夕の月
小春日を膝に仔犬の三ヶ月
鳴翔たせ言葉足らざることくをり

色の名草

浜 明史

木の実降る洞ヶ峠や幟立つ
晴天に柿をのこせり過疎の谷
冬あざみぬた場に残るけもの臭
とりどりの色の名草や野面みち
小春日の紺の入江や帆が走る
朽ち残る栈橋返り咲くさくら
直ぐ転ぶ団栗独楽や爪楊枝

秋 移 る

— 佐藤よしい —

晴つづく白菊黄菊香を継ぎぬ
庭石に月夜のサンダル揃へ措く
身を入れし林中一葉一葉散る
秋風と連立ち来よと娘の便り
空高し九十媪に歩を合はす
灯下親し句帳に旅の日を記す
曼珠沙華この世の外へ誘ひたり
鳥渡る佐渡見て暮色深めたる
荒海を詠みたる人よ白秋忌
稲を刈る越路を歩く照り翳り

雁のこゑ五合庵より従き来たる
新蕎麦を啜り怒濤を見に行かむ
朝市の海色深き秋刀魚買ふ
砂浜に誰か呼ぶ声霧深し
畦草も露をむすべり旅の靴
鴉の声夕空あかね薄れつつ
虫時雨舌に消したる句の行方
小鳥来てすぐ去り原稿用紙在る
師の忌待ち朱を深めたる木守柿
靴先へきほひ心の冬隣

山河集

同人作品



神蔵器選

仁和寺に入りて十月桜かな
中村 洋子

十三夜京の七口昏れ残る
萩焼の白釉垂るる雁渡し
その上に南アルプス葡萄棚

良寛の見舞状あり雁の声
天高し志功の鯉が襖跳ね

曲り家の縁に日のさす秋思かな
下山田美江

書館にヒポクラテスの木の実落つ
剣道着干す東大道場秋うらら
稲田とぶ速力二百三十キロ
鳥渡る銀河高原の赤ポスト

軒下に重ねる割木や穴まどひ
贅桶の立てかけられて石榴充つ
ヴァイツェンの醸す高原霜しづく
「ぼつたり」の上に浸すや鬼胡桃
みちのくや縄文色の鬼胡桃

ここよりは産卵保護区水の秋
大野 英美

埋めもどす三十九号草の花
一邑一寺鶏頭花朱を極む

ジーンパンの足しぼられて案山子立つ
平井 改子
稲掛けて透き徹る空広げけり
踏む音の急に嵩なす朴落葉
秋潮の轟音返す巖襖
竜田姫訪うて尼寺はなやげり

風土賞作品

冬 鷗

柴田久子

ガスの炎のより美しき大旦
河童の碑見て来し夜の酒おぼろ
雷鳴に積木の家の倒れ落つ
今はなき木挽町名夏芝居
打水の仕舞ひは宙に向け放つ
ハンカチの染みやオセ口の涙かも
本流に劣らぬ支流赤のまま
高原の風むらさきに蔓竜胆



家康公眠るうしろや月昇る
黒々と竹筆の節 獺祭忌
杉木立月の通りし雲白し
刻止まる是清邸の新松子
桂郎の俳人似顔絵 秋うらら
あきつとぶ昭和の空を採すかに
冬鷗真白き風となりて翔ぶ
大いなるくさめ鉄砲海へ向け
枯芝に糸くぼを殖やす横^は浜^まの風
冬薔薇の一語一語を抱きにけり
光背のごとき山並冬の滝
シヤンパンは星の味なりクリスマス

新人賞作品

竹人形

近藤 幸三郎

秋風や潜水服の鉛抜く
カサブランカ最終便で着きにけり
迎へ火や踊り支度の母が来る
白鷺に能の歩みの滑川
燠となる母の手紙や雪来るか
竹人形雪待ち顔となりにけり
船笛の餅となりし初山河
縛られて上海蟹の懐手



凍蝶にあと一寸の朝日かな
繰り返し母に答へし春隣
逃げ水の先を急ぐは山頭火
まんさくや谷深ければ日の淡き
きのふより大きな没日芹洗ふ
花菜咲く遊佐の船出の潮曇
序の舞を舞の始めに春の蝶
踏青やポップコーンにも影があり
鶯やパン工房の炉が開く
彗星の尾に触れてより墓に恋
目高散る日暮の風のいたづらに
鎌倉に仏のこりて朴の花

風土独語／神蔵 器



姫神山へ放り上げたる後の月

根岸 善行

泷民公園の鶴飼橋から、北上川をはさんで東に姫神山、西に岩手山が眺められる。この二つの山を啄木はふるさとの山と呼んだ。岩手山は

やはらかに柳あをめる北上の

岸辺目に見ゆ泣けごとく

の代表歌のごとく、岩手山の名が入っていないまでもそれとよく解るもの他に

神無月岩手の山の初雪の

眉にせまりし朝を思ひぬ

をはじめ、岩手山の名の入ったものがかなり多いが、不思議なことに姫神山の名が入った歌は見当たらない。

なつかしき故郷にかへる思ひあり

久し振りにて汽車に乗りしに

汽車の窓はるかに北にふるさとの

山見え来れば襟を正すも

など固有名詞は入っていないが、心にかいた山は多分姫神山だと思われる。もっとも二首目は「望郷の丘」の碑には岩手山であるが……

岩手山は直接的で眼前に力強く啄木を励まし、また思いをぶつけ、姫神山は望郷の山、それだけにいつもやさしくなつかしい。さて掲出句は鍛錬会に出句されたもので、十月八日は十三夜（後の月）であったが、会場の沢内銀河高原ホテルからは岩手山も姫神山も見えない。おそらく岩手山も姫神山も、前日盛岡駅前のマリオスの展望階から眺めたイメージの残像、岩手山はすでに初冠雪があり、南部富士とか岩手富士と言われるように、その勇姿の美しさに圧倒された。一方、姫神山はゆるやかな三角の頂を見せて、よく晴れているのに、ただ黒くやさしく眺められた。もしこの句が岩手山であったら私は採らなかつたであろう。

鶏頭咲く子ども 一一〇番の家

中村 洋子

一一〇番は警察に事件を通報するときの電話番号である。私は子ども一一〇番は知らないが、事件の通報よりも子供自身が危険を感じたり、困ったことが起きた時に駆け込み、救いを求めるところのようである。学校が通学路に当り、常時誰かが居るような商店とか、住宅でも一階に住居のあるような家をお願いして、子ども一一〇番の貼紙を出していたりする。鶏頭が赤く燃えているのも、警察の赤灯のような感じである。（以下略）

風土集



神蔵器選

姫神山へ放り上げたる後の月 上尾 根岸 善行

栗拾ふ熊棚ありしところまで
青空や握りしめたる不作の穂

啄木の川や初冠雪の山

山下りて再び秋の入日かな
秋冷やくづれて抜けるコルク栓 横浜 中村 洋子

光悦と花押のありて十三夜
鶏頭咲く子ども一〇番の家

秋深む「わだばゴツホになる」志功
くれないゐに口の割れ出す石榴の実

秋思かな円柱ポストに口一つ 横浜 近藤幸三郎
月番のみがく大釜 秋祭

出来秋のキッツに残る鑿の痕
黄の花に黄の八号の大南瓜

色鳥の谷戸に騒ぎて虚子の句碑

ロシア法の学者が提げて初さんま 東京 禅 京子
深秋の忘れボールは空へ蹴る

駒込屋寺

比翼塚の昏るる十月桜かな
秋風やわが見る方をひとみてもみて

秋の鯉日向を呑みてをりにけり 川崎 中根 美保
欄干に深山の冷えや秋の滝

苗箱の桜紅葉を溜めてをり
秋風や古地図の地名海へ向き

日展へ雨の噴水上がりけり
一鉢ごとをうべなひ松手入 横浜 安永 圭子

色鳥や八千穂の土牛美術館
秋冷や峡の最終バスを待つ

乗りつぎのバスを待つ間のきのこ汁
原宿の松ぼつくりのオブリエかな